

不登校・引きこもり等の課題を抱える青少年支援事業 ～諫早自然の家に来てみんなね！（こども医療福祉センター連携事業）～

〔主催〕 国立諫早青少年自然の家

〔期日〕 令和4年10月31日（月）

〔活動場所〕 国立諫早青少年自然の家及びその周辺

〔参加者〕 こども医療福祉センターに入院する中学生15名（男子8名、女子7名）

〔担当職員〕 葛島 隆文

1) 趣旨

自然の家での様々な体験活動を通して、不登校、引きこもりなどの課題を抱える青少年に自然体験活動の楽しさや達成感を感じさせ、自己肯定感や自己有用感を高める。また、他者との交流や自然の家での規則正しい生活を通して、基本的な生活習慣づくりのきっかけとする。

2) プログラム

	9:20	10:00	10:30	11:30	12:30	13:00	14:30	15:00	15:30	
10/31 (土)	マイクロバス 迎え	受付	開講式 ハイキング 「往路」 (里山コース)	昼食 弁当	ハイキング 「復路」 (里山コース) ※バス利用	野外炊事 「タラッキー クッキー」	シ エ ア リ ン グ	閉 講 式	マイクロバス 送り	解 散

3) 活動の様子（※病院側の意向により、写真の掲載なし）

【開講式、アイスブレイク】

参加者の安心感が高まるよう、屋内で円になり、スタッフら全員の顔が見えるようにして会を始めた。1日のねらいを全員で共有し、日程説明後にアイスブレイクを行った。アイスブレイクでは、ひらがなカードを使用したアクティビティーを実施し、個々の考えを表出しやすいように注意して活動を進めた。医療スタッフも積極的にアイスブレイクに参加することで子ども達は全員活動に参加でき、発声にてコミュニケーションをとる場面も多く見られた。

【ハイキング】

全員が九電みらいの森入り口ロータリーまで歩くことができた。途中、地面が荒れている場所もあり、足の疲れを訴える子どももいたが、全員で声を掛け合いながら歩いた。木々や草花の植生に興味がある子どもが多く、質問があった場合は、全体で一旦止まってグーグルレンズを使用して説明した。

【昼食・魚の観察】

河川敷にマイクロバスで移動し、昼食を食べながら川辺での散策を行った。ペットボトルで作ったわなで魚を捕り、観察した。スタッフより捕れた魚の説明を行い、知識を増やすことができた。水の冷たさを心地よく感じたり、深呼吸をして川辺での空気や匂いを感じ取ったりする様子が見られた。

【野外炊事】

ピザ窯を使って、クッキー作りにチャレンジした。2班に分かれ、役割を分担しながら作業に取り組んだ。生地の感触が苦手な子どももいたが、型作りになると参加できていた。苦手な部分もフォローしながら作業に取り組むことができた。

【シェアリング】

2班に分かれて、焚火を囲んで、今日感じたこと、その場面、5感のどれかを発表した。言葉で自分の思いを伝えることが苦手な子どもが多かったが、各グループ全員が発言し、盛り上がっていた。

4) 評価

① アンケート結果（事業全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
70%	30%	0%	0%

② 参加者の声

- ・グループで1つの言葉ができた時、うれしかった。
- ・楽しみながらハイキングをすることができた。
- ・色々な草花や自然を感じることで良かった。
- ・きれいな景色を見ることができた。

5) 成果と課題

① 成果

こども医療福祉センター職員の方から、「今回のように自然体験をできる機会は貴重だ」との意見があり、参加者のアンケートでは、「心身のリラックスのためにもまた自然の家に来たい」との回答があった。これは、本事業の大きな成果の一つと考えた。来年度は、研修支援として年間2回の実施を予定する。外に出ることで心身が和らぎ、笑顔が多い一日を作ることができた。適度な運動とコミュニケーションが一つの要因である。

子ども達の翌日の疲れが心配であったが、全員が翌日登校しており、自然の中で十分にリラックスできたと考えられる。

② 課題

今年度と同様にスタッフを配置することは難しい。自然体験の機会の実施時期や頻度を検討していく必要がある。参加者に近い年齢層のスタッフの必要性が感じられるため、今後は大学生などより多くの若い法人ボランティアが事業運営に係わるような体制を整えていく必要がある。



目標4 質の高い教育をみんなに

自然体験活動を通して、リラクゼーションを図り、今後の QOL 向上のきっかけと



目標16 平和と公正をすべての人に

個人の意思決定を重んじ、様々な実態に応じて、学ぶ機会を提供す